



筑紫女学園大学リポジット

Behavior Observation in Intelligence Test Assessment (part1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 酒井, 均, SAKAI, Hitoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/951

アセスメントにおける行動観察(1)

酒 井 均

Behavior Observation in Intelligence Test Assessment (part1)

Hitoshi SAKAI

1. はじめに

現在日本で一番よく使用されている知能検査と言えば田研式田中ビネー知能検査であろう。

これは歴史的にみれば子どもを比較することを目的とした弁別のためのテストであり、年齢において標準とされる知的能力と被検査者がどのくらいの差があるのかを測っている。そして、その値はIQ（知能指数）といわれるスケールで表されている。

この田中ビネーでは被検査者の認知能力の差はその数値からうかがうことができない。一番新しい田中ビネーV（ファイブ）においては14歳以上の被検査者では認知能力の差を見るようになっているが13歳まではそうではなく従来のIQを使用する。

ここで問題になるのは幼児（2歳から6歳）においてはその他の認知検査（K-ABCやWISC等）において十分な結果が得られず、その子どもの特徴をとらえることが難しいことも多いということである。そこで田中ビネー検査において、子どもの検査時の様子や反応の仕方を十分観察し総合的に解釈していくことが重要になる。

この論文において、まずビネー検査の歴史を概観し、全体的な観察のポイントを見ていったうえで、各検査項目によってどのような観察のポイントがあるかを見ていくこととする。

2. ビネー検査の歴史

ビネー検査は1905年にフランスにおいてアルフレッド・ビネーとその弟子であるシモンによって誕生した。その後1908年に改訂が加えられ検査法としての体裁が整えられてきた。さらに1911年には基底年齢を設定し精神年齢を求める方法が明確にされている。

この検査法は画期的なものとして評価され、ヨーロッパやアメリカなどの諸外国に広まることとなる。各国でビネー検査の翻訳が行われ、その中で再標準化の試みも行われることとなった。再標準化の最も大規模なものはアメリカのターマンが行ったものである。ここで行われた検査が日本のビネー検査の基となっている。ターマンは1916年に「スタンフォード・ビネー検査」を再標準化の成果として発表した。ここで新たに導入されたものがIQ（知能指数）という概念である。1937年

には「新スタンフォード・ビネー改定版」が発表された。その後、1960年度版、1986年度版と改訂されるが、ここではIQの廃止・DIQ（偏差知能指数）の採択などがあり、1986年度においては、年齢尺度や精神年齢さえも廃止されている。ここで取り入れられたのはCHCモデルという知能の因子分析モデルである。

わが国ではどうであったかという点、1908年に三宅鉦一がビネーの検査を紹介している。ビネー検査を基に再標準化を行ったのは久保良英であり、1923年に「増訂知能検査法」を公刊している。

しかし、検査法として確立したのは鈴木治太郎が1925年に標準化した「鈴木ビネー検査法」であった。

そしてその後スタンフォード・ビネー知能検査の1937年度版を基にして、田中寛一は1937年に「田中びねー式知能検査」を作成した。そして田中はさらに、その「田中びねー式知能検査」に大幅な改良を加え、1947年に「田中びねー式知能検査」として公のものとした。

その後、1954年に改訂はあったもののこれは体裁を整える程度のものであり、きちんとした改訂は1970年の「新訂田研・田中ビネー知能検査法」までなされなかった。やがて社会の変化、子どもの状況変化に伴い尺度や質問内容などの改正の必要が高まってきた。このため改訂作業が行われ、1987年に「全訂版 田中ビネー知能検査」が生まれた。ここでは、1960年にスタンフォード・ビネー知能検査で採択されたDIQを使わず、従来のIQを基本としている。

そして、2003年に現在使用されている田中ビネー知能検査V（ファイブ）が発刊となった。この版での特徴は2歳から13歳までは従来通りの知能指数と精神年齢を算出し、14歳以上は偏差知能指数を算出することである。さらに1歳級以下の発達を捉える指標「発達チェック」を置いたことも新しい試みであった。

3. 全体的な観察のポイント

田中ビネー知能検査Vの実施マニュアルには観察記録として観察の観点を以下のように挙げている。

- ① 検査への取り組みはどうか
- ② 知的興味はどうか
- ③ 注意力はあるか
- ④ よく考えてやっているか
- ⑤ 自信をもってやっているか

さらに、検査のアセスメントシートには行動観察の記録として大きく「検査の導入と経過」「問題への取り組み」「問題に対して」の3つを表記している。

このうち「検査の導入と経過」では、導入場面・テスター・経過の3つの観点から見ていく。

導入場面においてはどのような様子であったのか、スムーズに入室や逃げ出すや泣くなどチェックする項目が挙げられている。テスターについてはラポートがとれたかなどと人見知り、反動的、緊張など子どもの様子がいくつか挙げられておりチェックするようになっている。経過については

導入から終了までの検査全体を通じて子どもがどのような取り組み方をしたのかチェックする。

「問題への取り組み」では、検査問題に対する子どもの反応を「意欲（興味）」「反応速度」「集中力」「粘り強さ」「言語の明瞭さ」「言語の表現力」「手先の器用さ」「作業速度」の8つの観点で観察し、それを5段階評価でチェックしていく。

「問題に対して」では子どもの反応についてチェックするようになっている。この中の細項目として「質問に対する応答性」「難しい問題に対して」「問題を解いた後」「言語について」「動作、作業について」の5つがある。

「質問に対する応答性」は、質問に対して子どもがどのように反応するかについてチェックしていくものである。「話を聞く（よく聞く／聞かない）」や「何度も質問を聞き返す」などいくつかの様子がそれぞれについてチェックしていく。ここでは大雑把な子どもの様子を捉えることができる。

「難しい質問に対して」では、難しい質問に対し時、子どもがどのような反応をしたかをチェックしていく。「怒る」「考え込む」などいくつかの様子例が記されておりそれに基づいてチェックしていく。

「問題を解いた後」では、問題に挑戦し、それを解いた後にどのような反応を示したかをチェックしていく。「はしゃぐ」「無頓着」などや「正誤を気にする」など、その時の様子をチェックしていく。

「言語について」では先にあげた「問題への取り組み」に挙げた「言語の明瞭さ」「言語の表現力」に加えてさらに具体的にチェックしていく。「ハキハキと話す」「声が小さい」など、また「吃る」などの特徴も観察し捉えていく。

「動作、作業について」では、「問題への取り組み」に挙げた「手先の器用さ」「作業速度」に加えて、さらに具体的にチェックしていく。「慎重」「粗雑」などの様子から「試行錯誤しながら行う」「計画的に行うなど」「行きあたりばったり行う」などの実施方略の様子をチェックしていく。

また、ここでは挙げられていないが、言語性の課題に対する反応と動作性の課題に対する反応はどうあったかも大事なポイントとなる。言語での課題は苦手であるが、視覚的に課題の内容がはっきりしているものは良くできるなどである。この時も、指示を聞き取り理解して課題を行なっているのか、課題を見て被検査者が判断して行なっているのかも大事なポイントである。

4. 行動観察のポイント（各項目）

ここからは検査項目の一つひとつについて観察のポイントを挙げていく。実施マニュアルに書いてある注意事項などは除き、子どものどのような反応を見ていくのか、どのようなことに注意していくのかを述べる。

《 1歳台の問題 》

第1問（チップさし）

- ・チップの持ち方はどうか。

チップをどのように持っているのか。また、差し棒に入れる時、穴を意識しているのか。入れにくい時差し棒を自分で支えるなどの行動が見られるのか。

- ・チップの順序へのこだわりはないか。

チップを入れる時に色をそろえて入れるのか、それともランダムに入れようとするのか。こだわりがあるのか、ないのか。こだわりがあってもその程度はどうか。

- ・指示の理解はどうか。

動作模倣で入れているのか、ある程度言語指示を理解して課題をしているのか。

第2問（犬さがし）

- ・犬に注目しているか

声掛けだけでは犬に注目できず、さらなる声掛けが必要であったか。視覚的に注目するように犬を持って子どもの前で振る必要があるか。

- ・指示に従えたか

隠したとたんに出なかったか。
5つ数える前に手が出なかったか。
犬を見つけたら自分で隠そうとしなかったか。

- ・探し方はどうであったか

迷わずに開けに行ったか、迷いながら開けに行ったか。
視線の動かし方はどうであったか。

第3問（身体部位の指示（客体））

- ・視線の動かし方はどうだったか。

素早く全体を見ていたか、下からゆっくり見ていったか。

- ・身体部位を的確に示せるか。

戸惑いながら指さししているのか、素早く的確にさせているのか。
テスターの表情を伺いながら指しているのか。

第4問（語彙（物））

- ・物に注目できているか。
注意がちゃんと物に向いているのか。
自分が興味あるもののみ注目するのか。
- ・物を取ろうとしないか。
興味があるもの（飛行機や車）の時、手が出ないか。
- ・動作で示そうとしないか。
スプーンを手にとって食べる真似をしないかなど。

第5問（積木積み）

- ・手指の動作の動きはどうか。
積木を持つのは2指か3指かもしくははにぎりこむのか。
素早く手に取れるのか、明らかに不器用なのか。
- ・すぐに手を出していないか。
積木を見たときに手を出していないか。
- ・指示に従えているか。
積むのではなく他のものを作り出さないか（横に並べて列車など）。
- ・失敗した時どうしたのか。
すぐにあきらめてしまったのか、再チャレンジに移れたのか。
- ・積み方にこだわりがなかったか。
きちっとそろえようとしていなかったか、さっさと積んでいなかったか。

第6問（名称による物の指示）

- ・視線の動かし方はどうか。
名称を言われたときにどのように図版を見ているのか、全体を把握しているのか、一つひとつ確認するように見ているのか。

- ・指示に従って指さししているのか。

自分勝手に指さしていないか、その時言葉が伴っているかどうか。

- ・どのような失敗をしたのか。

興味あるもののみ指せたのか、日常生活の中で使われているもののみ指せたのか。

第7問（簡単な指示に従う）

- ・すぐに手が出なかったか。

物を並べる前にさっと手が出なかったか。

- ・指示が通ったのか。

特に「ボタンを箱の上ののせてください」などの課題の時にどのような失敗をしたのか。

ボタンをテスターに渡そうとしたのか、箱に注目して開けようとしたのか。

ボタンを箱の上という課題ができた後に「はさみを積木のよこ」という課題に対してはさみを積木の上ののせようとしたか。

第8問（3種の型のはめこみ）

- ・指示を待たずにすぐ手が出ていないか。

衝動的に手を出して型を取ろうとしていないか。

- ・どのように型をはめたか。

スムーズに型をはめ込んだのか、試行錯誤してはめ込んだのか。

1回目と2回目ではスムーズさが変わったのか。

- ・自分勝手な行動はないか。

はめ込んだらすぐに自分で型はずしてしまわないか。

第9問（用途による物の指示）

- ・視線の動かし方はどうか。

名称を言われたときにどのように図版を見ているのか、全体を把握しているのか、一つひとつ確認するように見ているのか。

- ・失敗の状況はどうか。

経験があるものはできるのか、また「拭くときに使うものはどれですか」という質問の時に椅子を指す場合がある、その時に経験上その様な事があっているのか。

第10問（語彙（絵））

・発音はどうか。

構音の問題はないか、あるとしたらどのような問題か。
年齢に不釣り合いな幼児語が残っていないか。

・動作で示そうとしないか。

例えば「かさ」の絵の時にかさを開く真似をして示そうとしてないか。

・実物で示そうとしていないか。

例えば「手」の絵の時、テスターに向かって手を突き出して示そうとしないか。
もしくは「靴」の時自分の履いていた靴を見せて示そうとしていないかなど。

・どのような失敗があったのか。

日常生活で慣れ親しんでいるものは言えるが、そうでないものは難しいのか。
まちがって答えていないか（うま→しまうま、うしなど）

第11問（チップ指し）

第1問と同じ

第12問（名称による物の指示）

第6問と同じ

《 2歳台の問題 》

第13問（動物の見分け）

・視線の動かし方はどうか

全体をさっと見渡せているのか、下から順番に見ていっているのか。
順に縦に見ているのか、横に見ているのか。
ランダムに視線を動かしているのか。

- ・課題を進めた時の様子はどうか

最初は全体を見渡してみていたが、途中から覚えていてスピードが速くなった。
最後まで順番に確認していた。

- ・失敗の様子はどうかであったか。

なんの動物を失敗したのか。例えば、慣れ親しんでいる動物は大丈夫だったが、知らない動物はマッチングがうまくいかなかったのかなど。

- ・手指の動きはどうだったか。

カードをどのように手に取ったか。
上に乗せるまでの動きはスムーズであったか。

第14問（語彙（物））

第4問と同じ

第15問（大きさの比較）

- ・視線の動きはどうか。

2つの図を一度で把握しているのか、何度か見比べているのか。

- ・正確さはどうか。

1問は正解したが、2問は失敗、3,4問は正解したなど。

第16問（2語文の復唱）

- ・やり方をすぐに理解できたか。

一度で理解し復唱できたのか、何回か指示しないと復唱できなかったか。
もしくは、最後まで指示が理解できなかったのか。

- ・復唱の仕方はどうだったか。

きちんと復唱ができたのか、最後の単語のみ復唱していないか。または余分な補足はなかったか（大きいくま→大きいくまがいてねなど）。

- ・発音の様子はどうかであったか。

年齢に不釣り合いな発音の幼さが残っていないか。

第17問（色分け）

- ・ 指示をまたずに行動していないか。
チップを色別に積み重ねたり、並べたりしないか。
指示をまたずにすぐに入れ始めないか。
- ・ 色分けの方略はどうか。
赤のみ最初に箱に入れた後、黄を他の箱に入れるのか、一つずつ交互に入れているのか。
それとも手にした順に入れているのか。
- ・ 手指の動きはどうか。
さっとつまんでいるのか（この時も2指でつまんでいるのか、3指でつまんでいるのかに注意）。
動きが緩慢でなかったか。

第18問（身体各部の指示（主体））

- ・ 4つの部位をさせたか。
指さしで出来たか、手さしであったのか。
どの部位がさせたのか、どの部位がさせなかったのか。
- ・ 第3問との結果はどうか。
客体はあいまいであったが主体であるこの課題はきちんとできたなど。またはその逆。

第19問（簡単な指示に従う）

第7問と同じ

第20問（縦の線を引く）

- ・ クレヨンの持ち方はどうか。
クレヨンをどのように持っていたか、上手に持っていたか、握り込んでいたかなど。
- ・ 縦線の書き方はどうであったか。
スムーズに引いていたのか、若干揺れた感じで引いていたのか。
何本も線を引いていたか、余分なものを書いていないかなど。

第21問（用途による物の指示）

第9問と同じ

第22問（トンネル作り）

- ・指示をまたずに行動しないか。
積木を勝手に並べ出さないか、トンネルに積木を入れようとするか。
- ・積木のつかみ方はどうか。
さっとつまんでいるのか（この時も2指でつまんでいるのか、3指でつまんでいるのかに注意）。
- ・積木の積み方はどうか。
モデル通りに積めるのか、立方体の積木のみで作ろうとしていないか。

第23問（絵の組み合わせ）

- ・指示をまたずに行動しないか
提示したとたんすぐに組み合わせないか。勝手に裏返したりしないか。
- ・カードの持ち方、扱い方はどうであったか。
不器用さが目立つようなことはなかったか。
- ・2つのパーツの時と3つのパーツの時ではどうであったか。
2つまでは出来たが、3つの時は出来なかった場合、どのようにできなかったのか（組み合わせにまよっていたのか、てきとうに組み合わせてまちがったのかなど）。

第24問（語彙（絵））

第10問と同じ

5. おわりに

今回田中ビネー検査Ⅴの行動観察ポイントを検査項目ごとに2歳台までの検査項目について述べていった。これは、筆者の個人的な経験からまとめていったもので公式なものではない。

また、この観察ポイントをどのように生かしていくかについてはここでは述べていない。これから6歳台までの各検査項目の行動観察ポイントを述べていき、それらの後にどのように子どもの状態把握に生かしていくかを述べることとする。

参考文献

田中ビネー知能検査Ⅴ（実施マニュアル、理論マニュアル）（2003）、財団法人田中教育研究所（編）、
田研出版株式会社

（さかい ひとし：人間科学科 人間関係専攻 教授）

